茨城県行方郡北浦村

風　早　遺　跡

調査報告書

1990年9月

山田地区遺跡発掘調査会

例　言

1．当報告書は、茨城県行方郡北浦村山田字風早2279－2に所在する遺跡の発掘調査報告である。

1．当遺跡の調査は、北浦ゴルフクラブによるゴルフ場造成工事に先行する埋蔵文化財の発掘調査である。

1．当遺跡の調査は、北浦村山田地区遺跡発掘調査会（会長阿須間俊夫）の依頼により、日本考古学研究所（所長藤下昌信）が行なった。

1．当遺跡の調査は、現地調査及び整理を藤原　均（日本考古学協会員、日本考古学研究所）が担当して行ない、市村義和（日本考古学研究所）が補佐した。

1．当遺跡の現地調査は、平成２年４月より約１ケ月間かけて行ない、以後整理作業を行なった。

1．遺物の法量は、Ａ口径、Ｂ器高、Ｃ底径、Ｄ陵径とした。

1．調査にあたって、下記の方々の協力があったため記して謝意を表する。

茨城県教育庁文化課、北浦村教育委員会、北浦村ゴルフクラブ、熊谷組、北浦ゴルフクラブの作業員の方々

目　　次

例　　言
目　　次
挿図目次
挿表目次
図版目次

Ⅰ　調査に到るまでの経緯 …… 1
Ⅱ　調査経緯 …… 1
Ⅲ　位置と環境 …… 3
Ⅳ　調査結果の概要 …… 3
Ⅴ　遺構と遺物 …… 6
　　結　び ……17

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡地形図 …… 4
第３図　遺構配置図 …… 5
第４図　第１号住居址実測図 …… 7
第５図　第１号住居址出土遺物実測図 …… 8
第６図　第２号住居址実測図 ……10
第７図　第２号住居址出土遺物実測図 ……11
第８図　第３号住居址実測図 ……12
第９図　住居址関連遺物実測図 ……14
第10図　土壙、炉址実測図 ……16
第11図　溝実測図 ……17

挿　表　目　次

第１表　遺構一覧表 …… 5
第２表　第１号住居址出土遺物一覧表 …… 8
第３表　第２号住居址出土遺物一覧表 …… 9
第４表　住居址関連遺物一覧表 ……13

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　第１号住居址１
図版３　第１号住居址２
図版４　第２・３号住居址
図版５　第２・３号住居址
図版６　第３号住居址・第１号土壙
図版７　第１号土壙・炉址
図版８　第２号土壙・第１号溝
図版９　住居址出土遺物

I　調査に到る経緯

当遺跡は、株式会社北浦ゴルフクラブの用地内で、発掘調査の対照区域外であったが、設計変更等により切土されることとなり、立木の移転時に土師器坏・甕などが出土した。このため、北浦村教育委員会は北浦ゴルフクラブと埋蔵文化財の取扱について平成２年３月15日に協議を行ない、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、日本考古学研究所に調査を依託した。また新たに発見された遺跡であるが、ゴルフ場関連遺跡として調査を行うこととした。発掘調査は、平成２年４月より開始した。

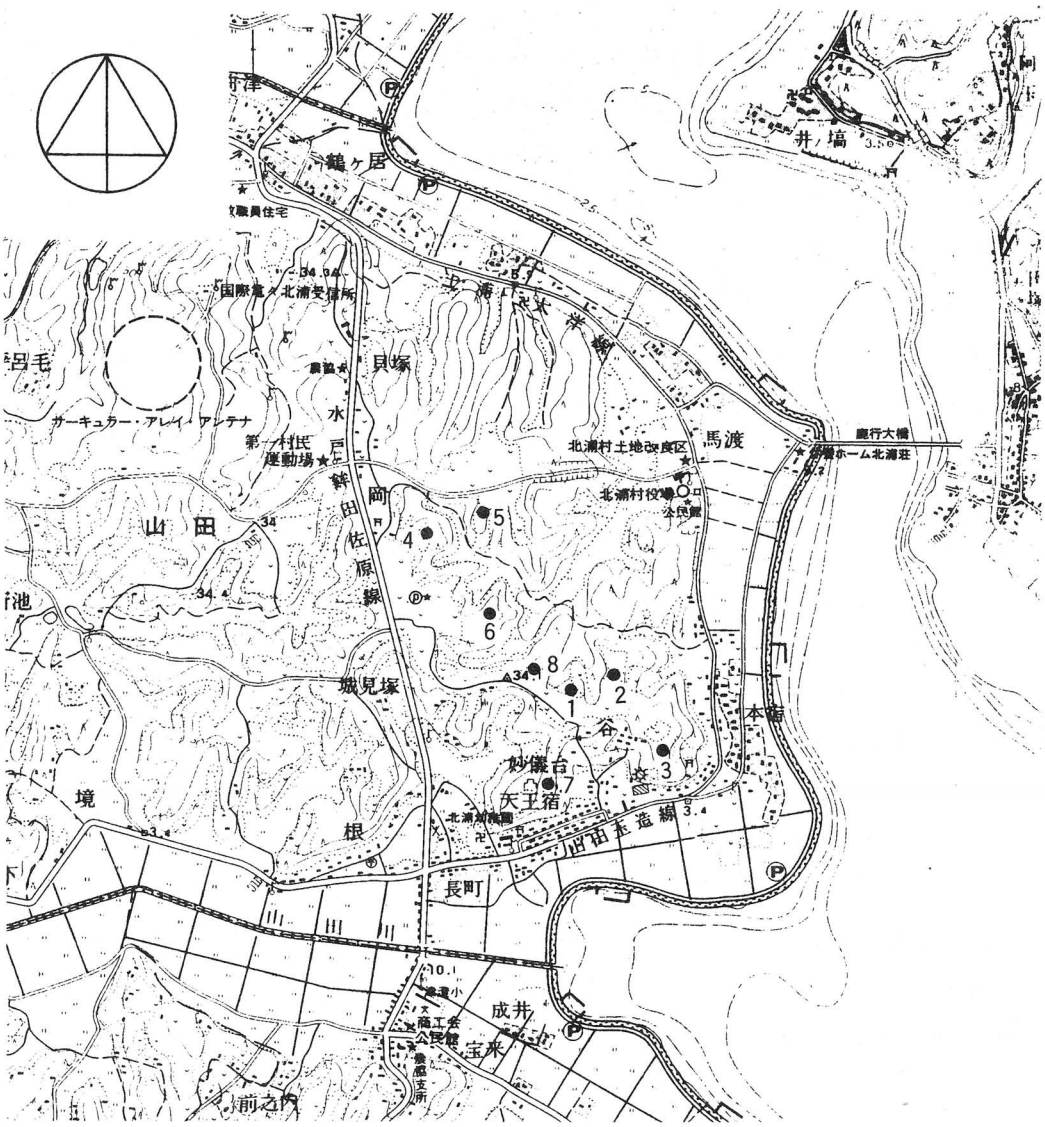
北浦ゴルフ場用地内の遺跡としては、今山遺跡、古屋敷遺跡、六台遺跡、古館遺跡、平遺跡の５遺跡が知られており、現地調査は終了している。これに今回の風早遺跡が加わり６遺跡となる。

II　調　査　経　緯

当遺跡の現地調査は、平成２年４月２日より開始した。調査は、調査範囲を確定した後にトレンチを中央部に２本十字に設定し、深さ等を確認する。この後、表土除去作業を行ない４月３日に表土除去作業を終了した。表土除去後、遺構確認作業を行ない３軒の住居址、２基の土壙、１基の炉、１条の溝を確認し、４月５日にこの作業を終了した。

遺構調査は、４月６日から住居址、土壙、炉址、溝の順で行なった。第１号住居址は、４月６日～11日まで、第２号住居址は４月10日～14日まで、土壙は４月16、17日で、炉址と溝は４月６日～11日まで、第２号住居址は４月10日～14日まで、土壙は４月16、17日で、炉址と溝は４月17、18日で、各々の遺構調査を行ない、４月20日に遺構全測図の作成、全景写真の撮影を行なった。調査諸機材の移動は、４月21日に行ない現地での全作業を終了する。

整理作業と報告書執筆作業は、現地調査終了後に平遺跡の整理作業と併行し行なった。



1．日早遺跡　　5．今山遺跡
2．平遺跡　　6．六台遺跡
3．古館遺跡　　7．山田城址
4．古屋敷遺跡　　8．中ノ館址

第１図　遺跡位置図(1/3,000)

Ⅲ　位置と環境

当遺跡の所在する北浦村は、茨城県の南部で行方台地の中央に位置し、北浦に面している。行方台地は、広く深い開折谷が台地の内陸部まで樹枝状に入り込み、複雑な舌状台地を形成している。台地の内陸部は、比較的広い台地を形成しているが、先端部分は細長い舌状台地となっている。

当遺跡は、北浦に向い細長く突出している舌状台地から北方に向って、細長く突出した台地の先端部に位置する。谷を狭んだ東側の台地には、平遺跡（第１図No２）が所在している。また当遺跡と地続きで同じ台地上には、古館遺跡（第１図No３)、中ノ館址（第１図No８）があり当遺跡の南方には山田城址（第１図No７）がある。北西方向には、古屋敷遺跡（第１図No４）今山遺跡（第１図No５），六台遺跡（第１図No６）などが所在している。

当遺跡の所在する台地は、台地上の平坦部は宅地、畑地、山林などに、谷地部は水田等に幅広く利用されている。

Ⅳ　調査結果の概要

当遺跡を調査した結果、第３図に示したように３軒の住居址、１基の土壙、１基の炉址、１条の溝、風倒木穴１の諸遺構が確認された。

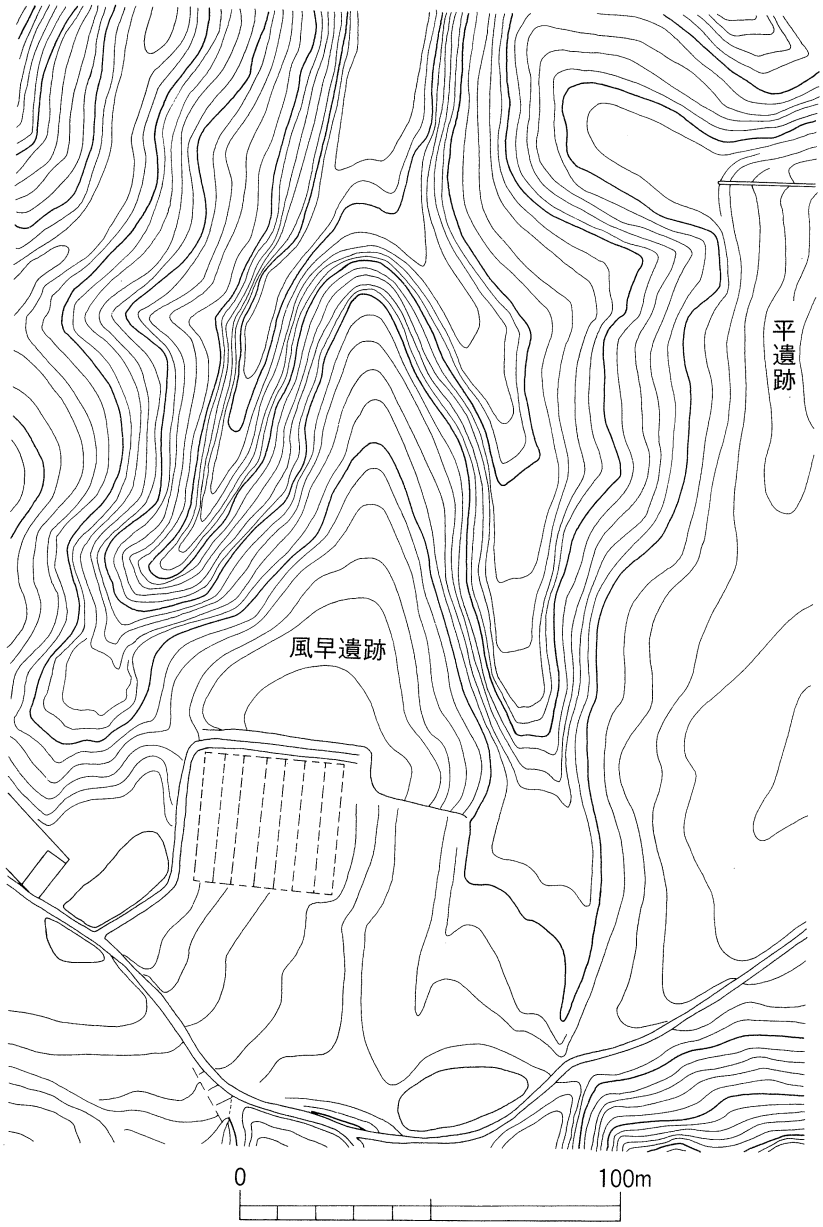
３軒の住居址は、調査区の南側に集中しており、土壙と炉址は北側に集中している。３軒の住居址は、西壁にカマドを持つ住居址（第１、３号住居址）と、北壁にカマドを有する住居址（第２号住居址）とに分かれ、規模からは第１、２号住居址のような大型と、第３号住居址のような小型とに分けることが出来る。

土壙は、長方形をなす土壙で北側の先端で確認され、周囲に関連する遺構は見当らない。これは、炉址と同様の状況を呈している。

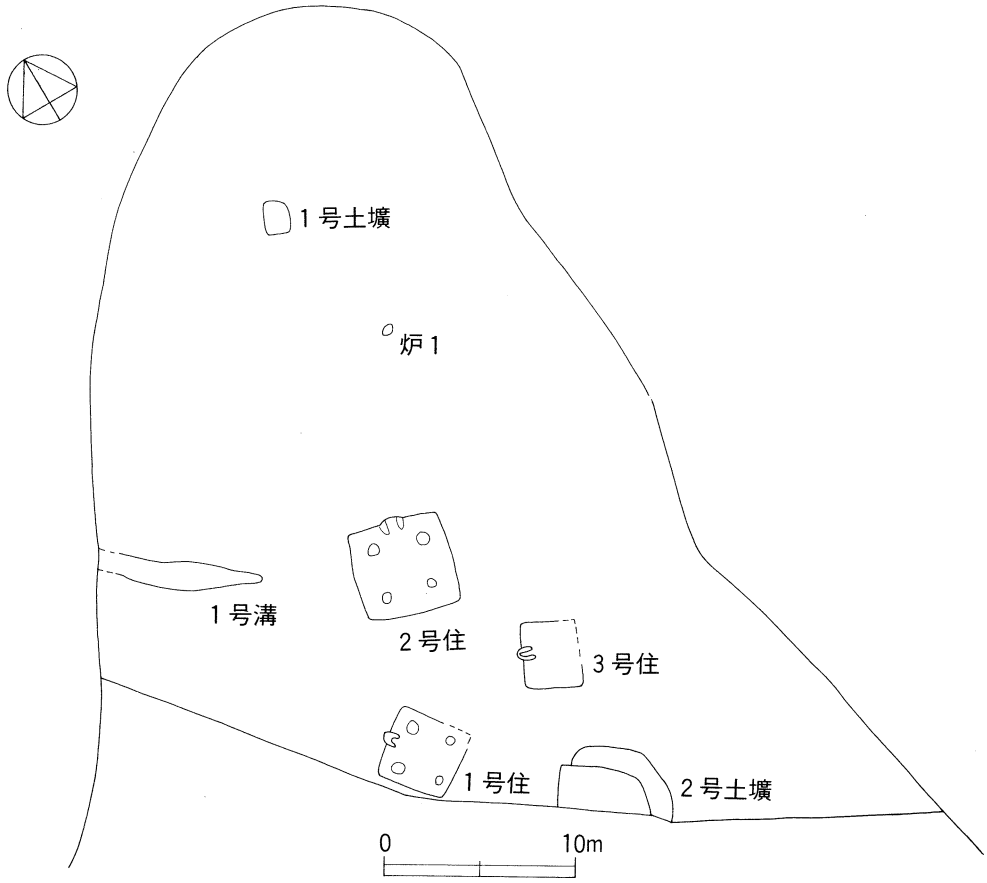
溝は、調査区の西側に掘り込まれ谷に落ちている。溝の東側には、同様の遺構は確認されず単独の溝である。

風倒木穴は、調査区の南端東側に位置し、1／2 以上を保存区域に有している。覆土上面には、焼土ブロックがある。第２号土壙として、報告する。

以上のように、当遺跡の調査結果から集落の中心は、調査区の南側に所在するようであり、今回はその北端部を調査したことと推定される。



第２図　遺跡地形図



第3図　遺構配置図

第1表　遺構一覧表

名称	法量(m)			方位	形状	柱穴	カマド	他
	東西	南北	深さ					
第1号住居址	4.21	4.42	0.30	N−37°−W	長方形	4	北壁中央	南東コーナー部消失
第2号住居址	5.18	5.00	0.26	N−19°−E	方形	4	北壁中央	東壁と南壁の中央部を消失している
第3号住居址	3.50	3.25	0.19	N−34°−W	方形		北壁中央	上面と南東コーナーを消失
第1号土壙	1.11	1.67	0.16	N−30°−E	隅丸長方形			
第2号土壙	1.80	2.95	0.45	N−18°−E	不整長方形			
炉址	0.70	0.60	0.13	N−30°−E	不整円形			
溝	(長) 7.40	(巾) 0.94〜1.35	0.15〜0.30	北東〜南西				

V 遺構と遺物

第1号住居址（第4・5図、第2表、図版2・3・9）

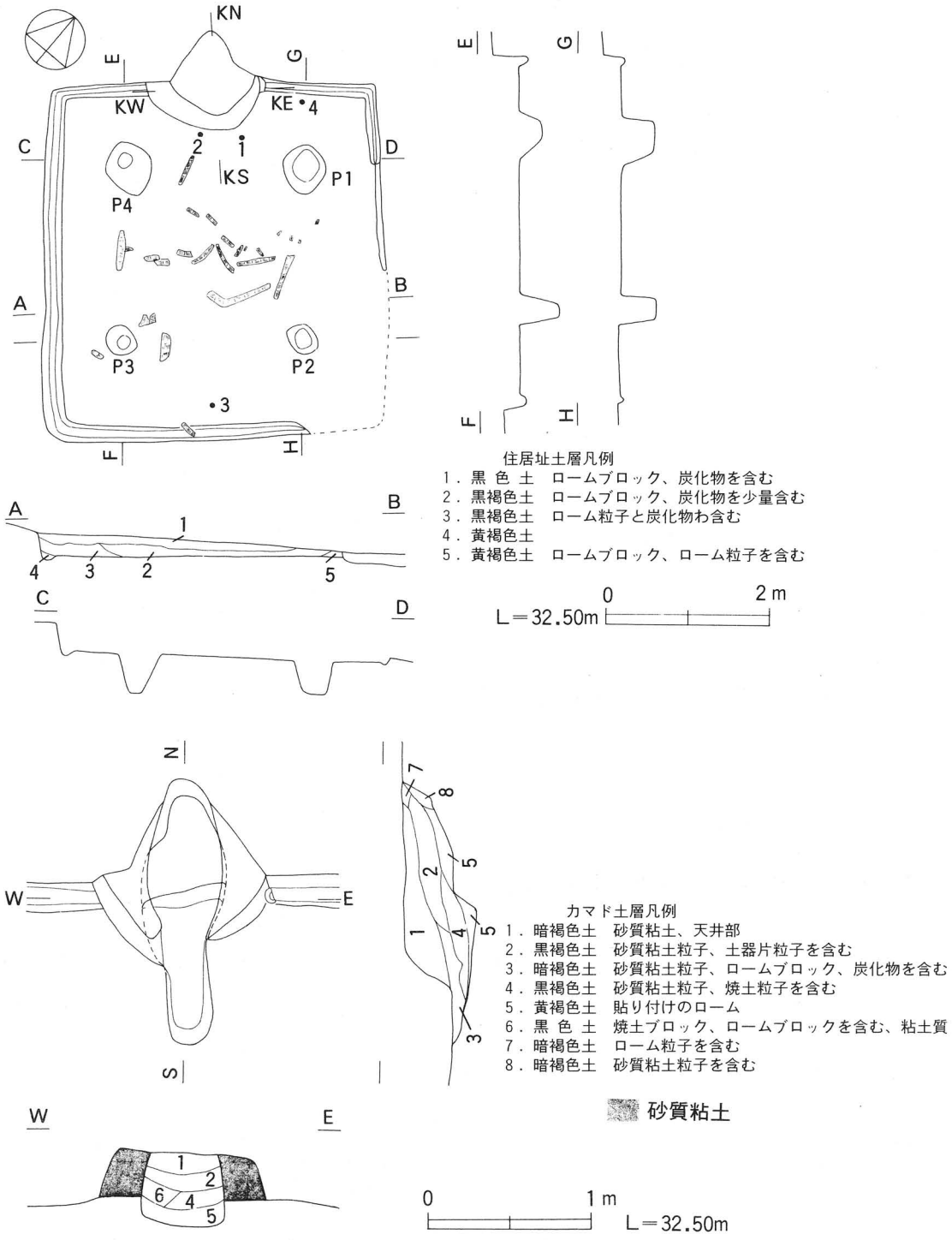
本住居址は、調査区の南端中央部に位置しているが、南東コーナー部付近は撹乱を受け消失している。大きさは、東西径4.21m南北径4.42m、深さ0.30mを計測し、長方形をなす住居址でN－37°－Wに方位を有している。床は比較的しっかりした貼床であるが、壁溝付近は柔弱な床面となっている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれているが、東壁は中央部から南東コーナー部付近まで撹乱により消失している。壁溝は、カマドと東壁中央北側から南東コーナー部以外全周している。大きさは、幅0.25m、深さ0.07～0.08mを計測する。カマドは、北壁中央部に位置しており、柱穴は対角線上に4本掘り込まれている。貯蔵穴は、確認出来なかった。

土層は、黒色土、黒褐色土、黄褐色土が堆積しており、黒褐色土と黄褐色土は各々2層に細分される。土層の堆積状況は、南方より黒褐色土（第2、3層）が堆積した後に黒色土（第1層）が堆積している。壁溝内には、黄褐色土（第4層）が堆積している。

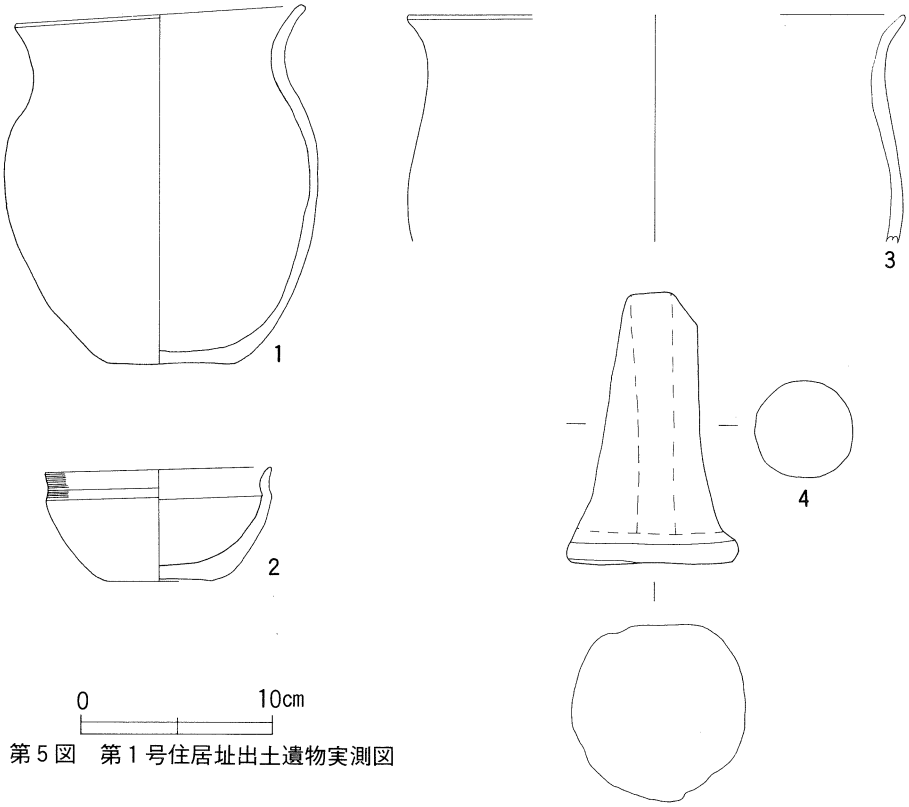
カマドは、北壁中央部に位置しており、長さ1.65m、幅1.09m（中央部）、高さ0.30mを計測する。火床部は、床面より0.15m程度下げ黄褐色土（第5層）を貼り付けて火床面を構築している。燃焼部は、住居址の北壁より手前に位置するようであるが、焼土の堆積は見らずに黒褐色土（第2層）、暗褐色土（第3層）、黒褐色土（第4層）が堆積している。また第2層の黒褐色土は、煙道部に担当する。煙道部は、火床面より住居址の床面と同一面まで立ち上がってから、煙道先端部に到っている。煙道の先端は、住居址北壁より0.61m程度突出している。煙道部底面には、黄褐色土（第5層）を貼り付けている。カマドの壁は、白色砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物としては、住居址内より土師器坏、甕、壺、須恵器坏、炭化物などが出土しているがその多くは破片で図示出来たのは、第5図に示した程度である。No1は、土師器甕型土器で口縁部から体部にかけ1／4程度を欠損し、床面より出土している。No2は、土師器坏の完型品で床面より出土している。No3は、土師器甕片で床面上10.0cmより出土しており、No4は支脚で床面より出土し、上端を欠損している。No1と2は、カマドの手前から出土していることから、坏と甕のセットと判断される。また、第3層上面で床面上5～7cmの所から炭化材が出土しているものの、床面は焼けていないため住居址廃棄後の流入と判断される。

出土遺物から、本址は鬼高期の住居址と判断される。



第４図　第１号住居址実測図



第５図　第１号住居址出土遺物実測図

第２表　第１号住居址出土遺物一覧表

挿図NO	名称	法量（cm）	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第５図 No.1	土師甕	A　15.4 B　17.8×18.8 C　6.5		底部は平底で体部は外傾ぎみに内傾、口縁部外傾。	口縁部、ヘラナデ 体部、縦位ヘラ削り後、粗いヘラナデ	長石、石英、砂 普通 暗褐色	表面磨滅 口縁部へ体部にかけて１／４程度欠損
第５図 No.2	土師碗	A　12.0×11.8 B　5.7×6.0 C　6.0×5.5	完	底部は内傾し、体部は内傾ぎみ外傾で低い陵を有す。口縁部やや外傾。	口縁部、ヘラナデ 体部、ヘラ削り後、ヘラナデ	石英、長石、砂 良好 暗褐色	
第５図 No.3	土師甕	A　(26.0) B　12.0		体部は、内傾ぎみに外傾し、口縁部は直線的に外傾する。	口縁部は横位ヘラナデ　体部縦位ヘラ削り後、端整なヘラナデ	長石、石英、砂 良好 淡黒褐色	口縁部～体部にかけて１／４程度残存
第５図	支　脚	径　14.3×5.1 下径　6.2×9.1		円形状でをなす。		砂 良好 赤褐色	上部を欠く

第２号住居址（第６・７図、第３表、図版４・５・９）

本住居址は、調査区の中央南側で、第１号住居址の北側に位置しており、東壁中央部と南壁中央部は撹乱により消失している。大きさは、東西径5.18m、南北径5.00m、深さ0.26mを計測し隅丸方形状をなす住居址で、方位をＮ－19°－Ｅに有している。住居址の床は、しっかりした床面の直床で中央部付近は貼床となっている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマドと北壁以外では全周している。大きさは、幅0.13～0.23m、深さ0.08～0.13m程度を計測する。カマドは、北壁中央部に位置しており、柱穴は対角線上に４本掘り込まれている。貯蔵穴は、確認出来なかった。

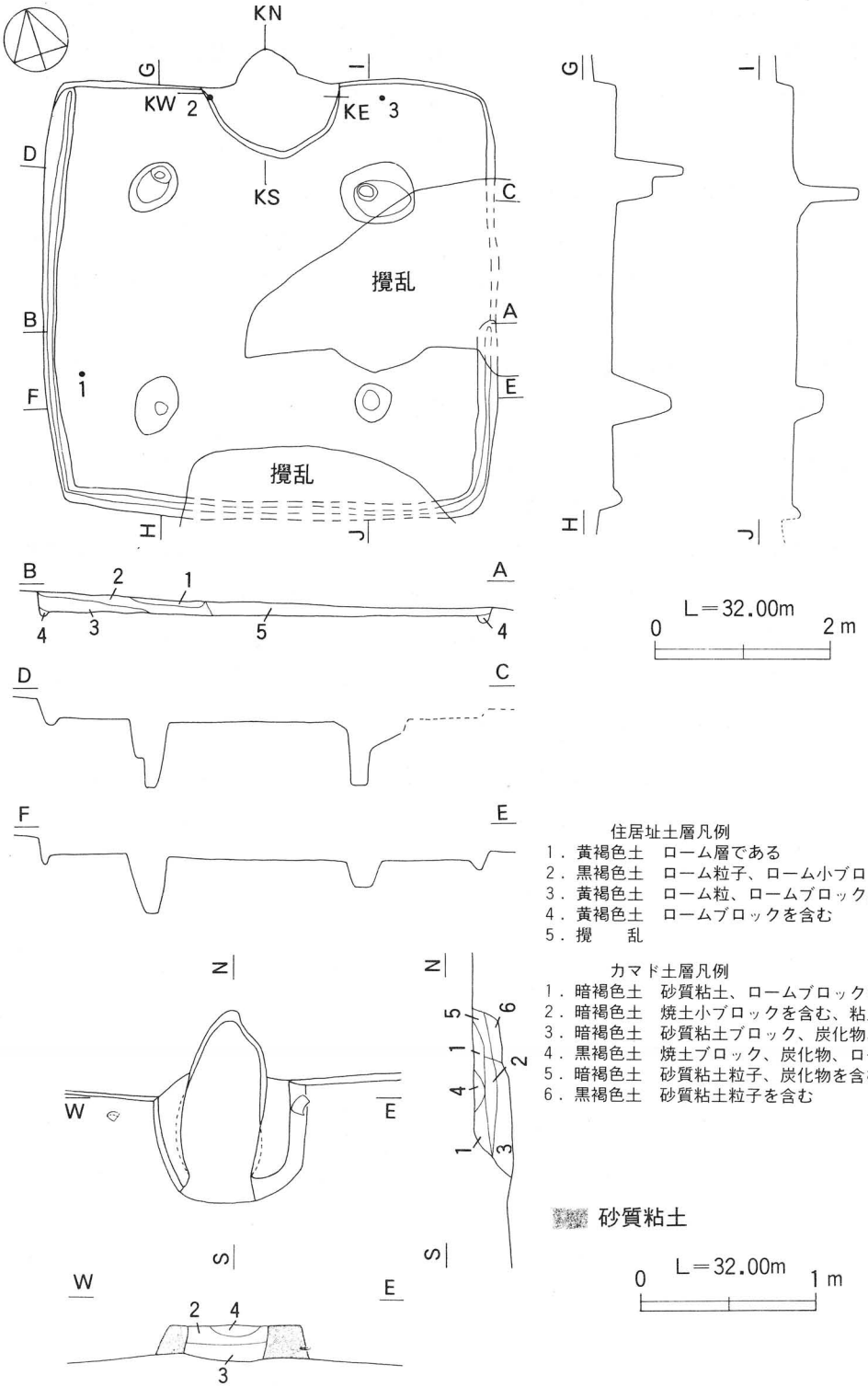
土層は、黒褐色土（第２層）、黄褐色土（第３層）が住居址内に堆積し、壁溝内には黄褐色土（第４層）が堆積している。また、覆土上面には黄褐色土（第１層）が堆積している。これらの各土層は、周囲より堆積しながらも東方に流れている。堆積状況は、レンズ状堆積である。

カマドは、北壁中央部に位置し長さ1.11m、幅0.88m、高さ0.19mを計測する。火床面は、住居址床面より0.03m程度掘り下げて火床面としているが、焼土の堆積は認められなかった。燃焼部は、火床部上面で暗褐色土（第３層）が堆積している。煙道部は、火床面より0.04cm程度立ち上がり住居址と同一面としてから、煙道先端部へと到る。煙道部の土層は、暗褐色土（第５層）と黒褐色土（第６層）が堆積しており、カマド天井部下位（燃焼部上面）は、火力により暗褐色土に変色している。カマドの壁は、白色砂質粘土を用いて構築している。

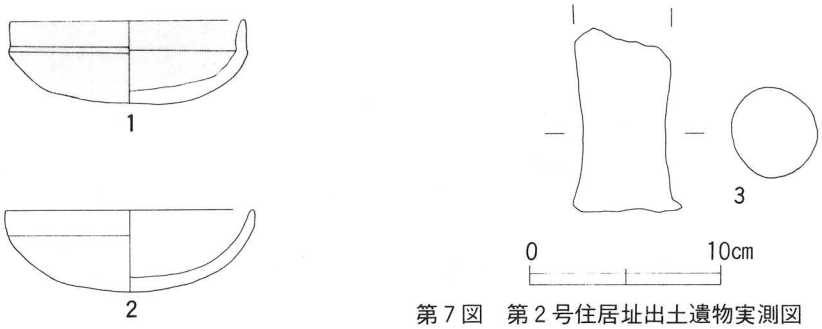
出土遺物としては、土師器坏、甕、須恵器坏、支脚などが出土しているものの、その多くは破片であり図示出来たのは第７図に示した程度である。第７図No１は、床面上より出土した土師

第３表　第２号住居址出土遺物一覧表

挿図NO	名称	法量（cm）	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第７図 No.1	土師甕	A　12.3 B　4.3 D　12.5	完	底部は丸底で、低いがしっかりした陵を有す。口縁部は垂直。	口縁部、横位ヘラナデ体部へ底部、ヘラ削り後、端整なヘラナデ	密 良好 暗褐色	内外黒色処理
第７図 No.2	土師器坏	A　13.0 B　4.3	1／3欠	全体に半球状をなし、口縁部は削り出されている。	口縁部、ヘラナデ体部ヘラ削り後、ヘラナデ、体部底面ヘラ削り	小石、石英、長石 良好 淡暗褐色	陵は弱く、その痕跡を残すのみ
第７図	支　脚	径 9.6×4.8×4.4		円形状をなす。		砂 良好 暗赤褐色	中央上部欠



第６図　第２号住居址実測図



第７図　第２号住居址出土遺物実測図

器坏の完型品で、内外両面とも黒色処理されている。No２は、土師器坏でカマド左側より出土し1／3 程度を欠損しており、床面上10.0㎝の所より出土している。No３は、土製支脚片で上端を欠損しており、カマドの右側で床面上４㎝より出土している。少量の出土遺物であるが、その出土状況からNo１と３は本址に供なう遺物と判断され、No２は廃棄後の流入と判断される。
これらの出土遺物から本址は、鬼高期に位置する住居址と判断される。

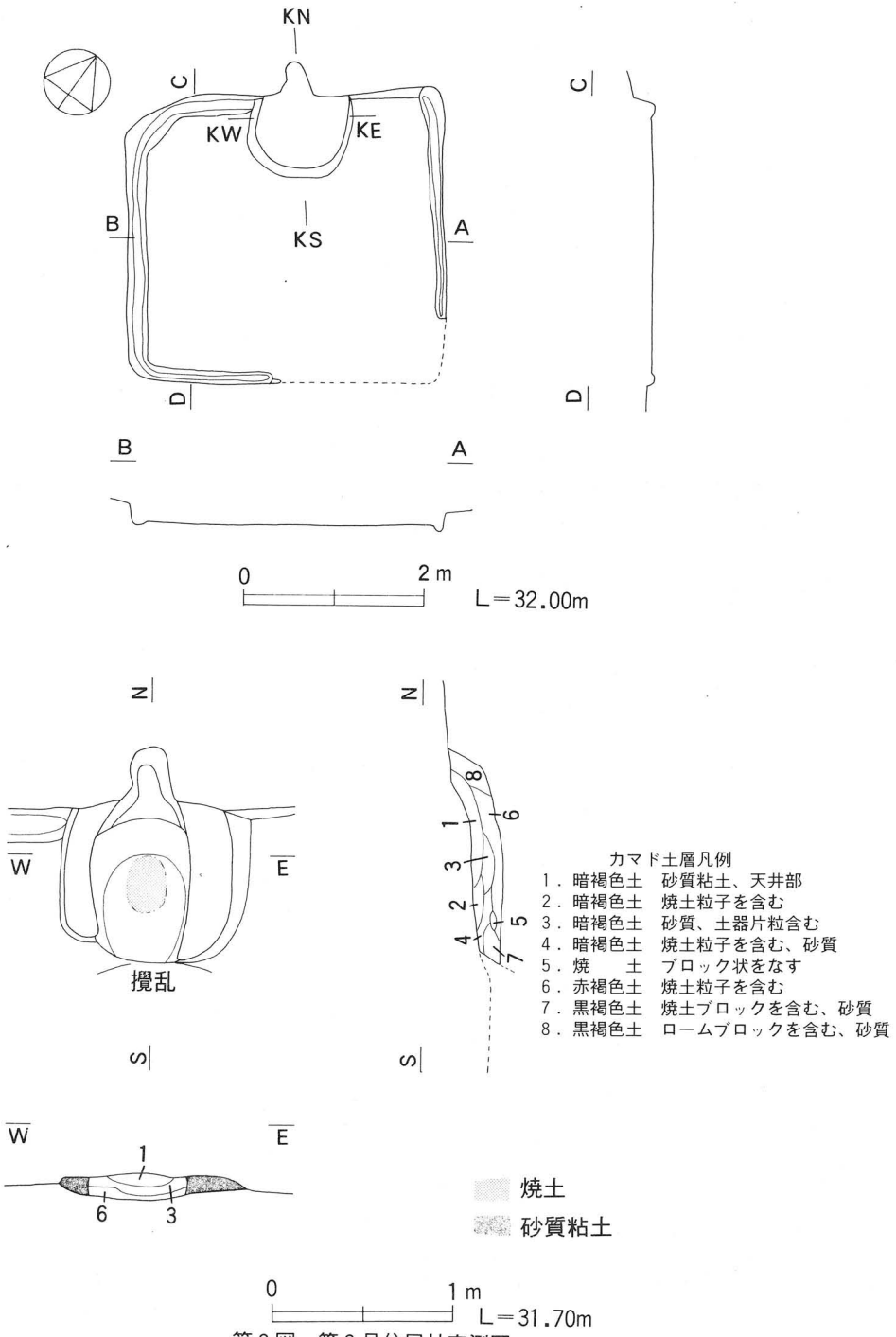
第３号住居址（第８、図版５・６、第４表）

本住居址は、調査区の南東部で緩やかな斜面部に位置しており、住居址の上面と南東コーナー部は撹乱を受け消失している。大きさは、東西径3.50m、館北径3.25m、深さ0.19mを計測し、隅丸方形状をなしている住居址で、方位をN－34°－Wに有している。住居址の床は、貼床であるが比較的柔弱であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、北壁東側が掘り込まれていない以外全周しているものと判断される。大きさは、幅0.10～0.20m、深さ0.08m程度を計測する。カマドは、北壁中央部に位置している。

土層は、黒色土と黒褐色土がローム粒子とロームブロックを含みながら堆積しており、壁溝内には黄褐色土（ローム＝ブロック）が堆積している。

カマドは、北壁中央部に位置し長さ1.21m、幅1.05m、高さ0.10mを計測する。火床部は、床面より0.07m程度掘り下げており、中央部に焼土が堆積しており焼土下位は良く分解している。火床部の上面で、赤褐色土（第６層）が堆積している部分が燃焼部に相当する。煙道部は、火床面より0.07m程度立ち上がり、住居址床面と同一面となってから煙道部先端に到っている。煙道部の先端は、住居址北壁より0.29m突出しており、黒褐色土（第８層）が堆積している。カマドの壁は、白色砂質粘土を用いて構築しており、天井部内面（燃焼部上面）は火力を受け変色している。

出土遺物は、住居址内とカマド内より少量の土師器坏小破片が出土した程度で、図示可能な遺



第８図　第３号住居址実測図

物は出土しなかった。出土した土師器坏から、鬼高期以降の住居址と判断されるが、確実な時期は不明である。

住居址関連遺物（第９図、第４表、図版９）

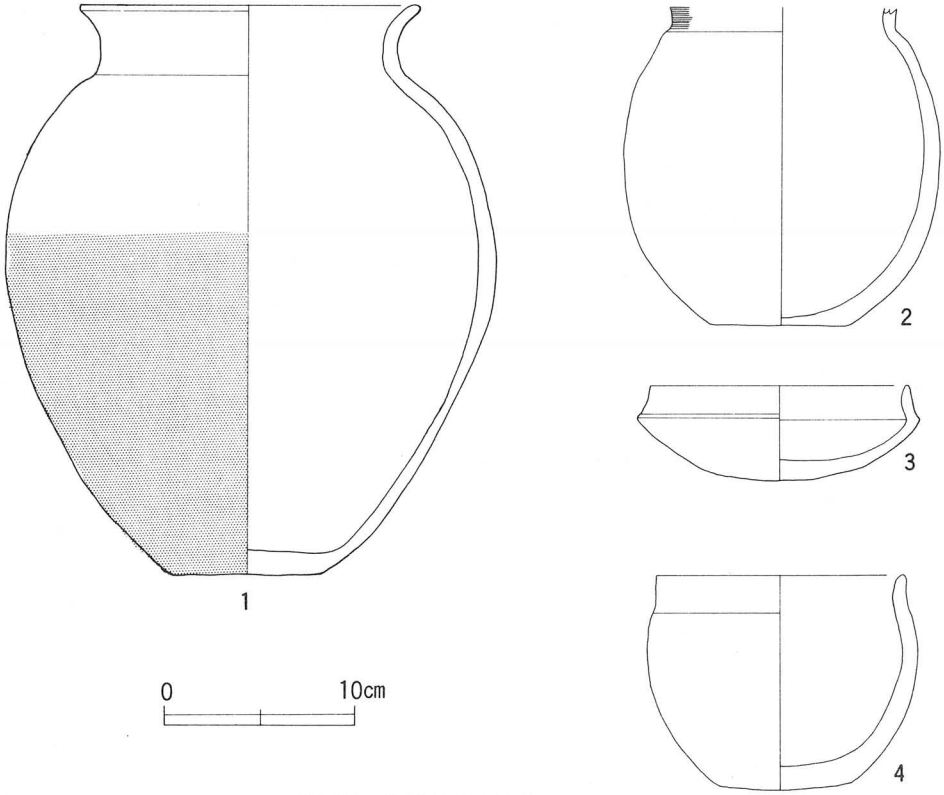
ここでいう住居址関連遺物とは、樹木の移植中に発見された４点の遺物である。本来は、住居址に供なう遺物であるが、現位置を失なっていると同時に出土地点も明確でないため、本項で述ることとした。おおよその出土位置は、第３号住居址付近であることから、同住居址の出土遺物である可能性が高い。

Ｎｏ１は、土師器甕で口縁部を1／2程度欠損しているが、体部と底部は完存している。口径は17.8cm、底径8.0cm、現存高30.0cmを計測する。体部の中央から底部にかけて、煤が付着しており体部内面は著しく磨滅している。Ｎｏ２は、小型の土師器甕型土器で口縁部と体部を1／3 程度欠損している。現高16.8cm、底径7.3 cmを計測する。Ｎｏ３は、土師器坏で口縁部から体部にかけて1／5 程度を欠損している。口径13.5cm、現高5.0 cm、陵径14.8cmを計測する。陵は、低く鋭い陵となっている。Ｎｏ４は、土師器で口縁部を1／2 程度欠損している。推定口径13.1cm、底径6.0 cm、現存高11.3cmを計測する。

以上の３点は、明確存出土地点を明らかにすることは出来ないが、ほぼ同一地点より出土していることから甕、坏、椀のセット品と判断される。

第４表　住居址関連遺物一覧表

挿図NO	名称	法量（cm）	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第９図 No.1	土師甕	A　17.8 B　30.0 C　8.0		底部は平底で、体部は内傾ぎみに外傾、口縁部は直立後湾する。	全体に粗いヘラナデ	長石、石英、雲母（粗） 良好	口縁部1／2 欠、内面磨滅大体部下半煤付着で黒ずんでいる
第９図 No.2	土師甕	B　16.7 C　7.3	片	底部は平底で、体部は内傾ぎみに外傾、体部上端に陵を有す。	頸部、横位ヘラナデ 体部、ヘラ削り後、端整なヘラナデ	長石、石英、砂 良好 暗褐色	口縁部欠損 体部1／3 欠損
第９図 No.3	土師坏	A　13.5 B　5.0 D　14.8		底部は丸底で、体部は内傾ぎみに大きく外傾陵はしっかりしており口縁部は直線的に内傾。	口縁部、ヘラナデ 体部、ヘラ削り後ヘラナデ	長石、砂 良好 暗赤褐色	口縁部へ体部にかけて 1／5 欠損
第９図 No.4	土師碗	A　(13.1) B　11.3 C　6.0		底部はやや丸底ぎみで体部は内傾ぎみに外傾口縁部は短かく直立。	全体的にヘラナデ	長石、石英、砂 良好 黒色	内面、磨滅大



第９図　住居址関速遺物実測図

２．土　壙

第１号土壙（第10図、図版７）

本土壙は、調査区の中央側で台地の先端部分に位置している。大きさは、東西径1.11m、南北径1.67m、深さ0.16mを計測し、隅丸長方形状を呈している。方位は、N－30°－Eである。土壙の底面は、北側が南側より0.08m程度下がっているがほぼ平坦である。壁は、南側がほぼ垂直に掘り込まれている以外斜めに掘り込まれている。床、壁ともに、しっかりしている。

土層は、底面にローム＝ブロック（第７層）が薄く堆積した後に、南方より堆積した状況を示しているものの、底面中央に焼土域（第４層）がある。焼土域の下位は、あまり焼けていない。そして、北壁より炭化物（第５層）、暗褐色土（第６層）、黄褐色土（第３層）、黄褐色土（第１層）などが順次堆積している。

出土遺物は、少量の土師器坏小破片が出土した程度である。

第２号土壙（第10図、図版８）

本土壙は、調査区の南東端に位置しており、土壙の西側は調査区域外に位置している。確認部分での大きさは、東西径1.80m、南北径2.95m、深さ0.45mを計測し、不整長方形状をなしている。方位は、N－18°－Eのようである。

土壙の底面は、中央がやや高く壁が低くなっており、壁は斜めに掘り込まれている。また、土の南西部には、東西径0.35m、南北径1.30m、深さ0.58mで長方形状をなす小土壙がある。小土壙の方位は、本土壙と同じである。底面は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

本土壙の土層はローム＝ブロックとローム粒子を主体とした黄褐色土が中心で、小土壙部に黒色土が堆積している。また、第２層中には焼土域（第１層）が認められるが、焼土域の周囲は何ら焼けていない。

出土遺物としては、少量の土師器小片が第４、５層の上位層より出土した程度である。

３．炉　址（第10図、図版７）

炉址としては、調査区の北側で１基確認されたのみである。大きさは、東西径0.70m、南北径0.60m、深さ0.13mを計測し、不整円形状をなしている。方位としては、N－30°－Eである。底面は、皿状をなし壁は東壁が斜めである以外ほぼ垂直に掘り込まれている。焼土域は、暗褐色土（第４層）に西側から堆積しており、底面の東側が比較的に良く分解している。焼土上には、黄褐色土（第３層）、暗褐色土（第１層）が堆積している。

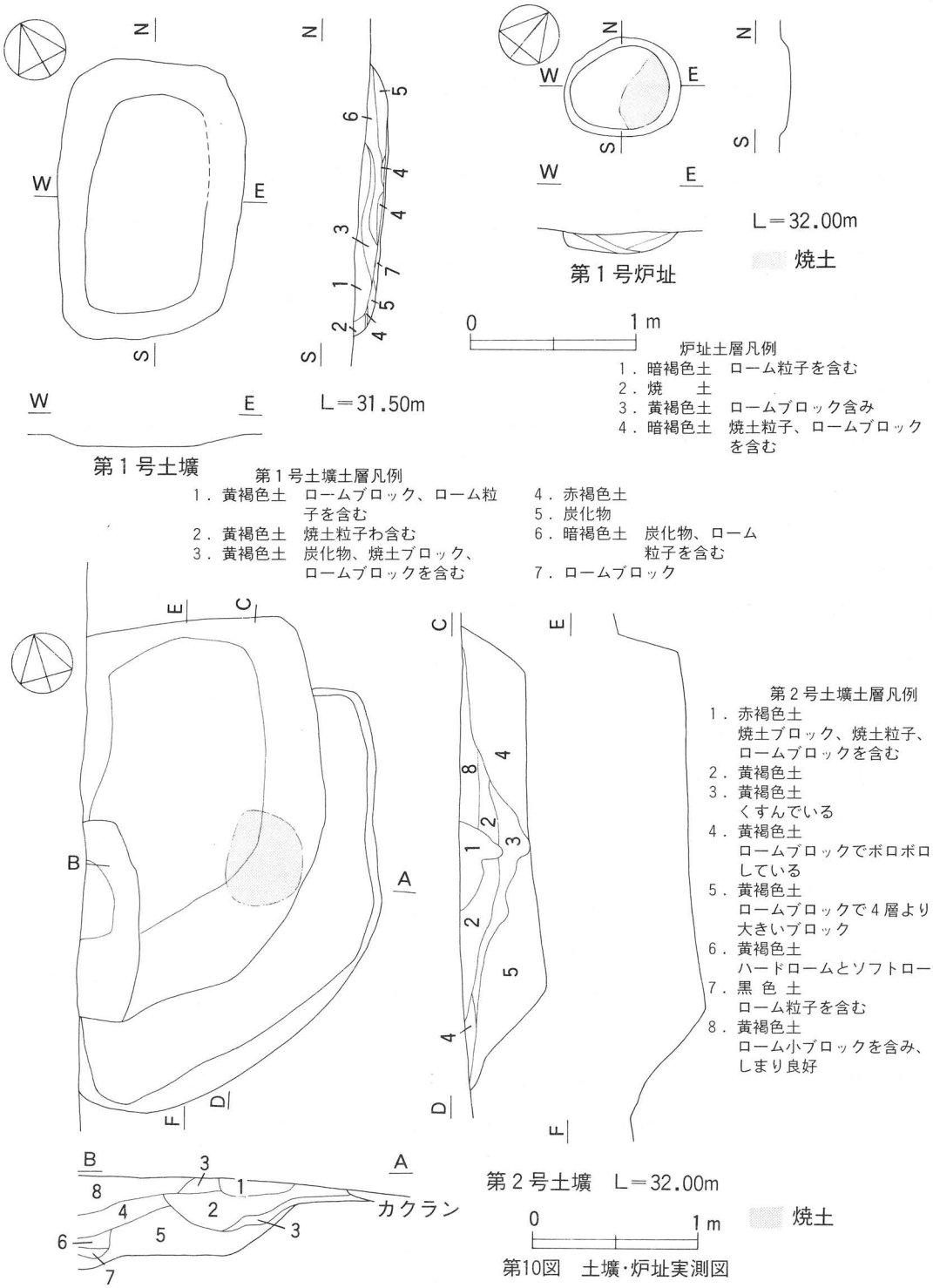
出土遺物としては、皆無である。

４．溝（第11図、図版８）

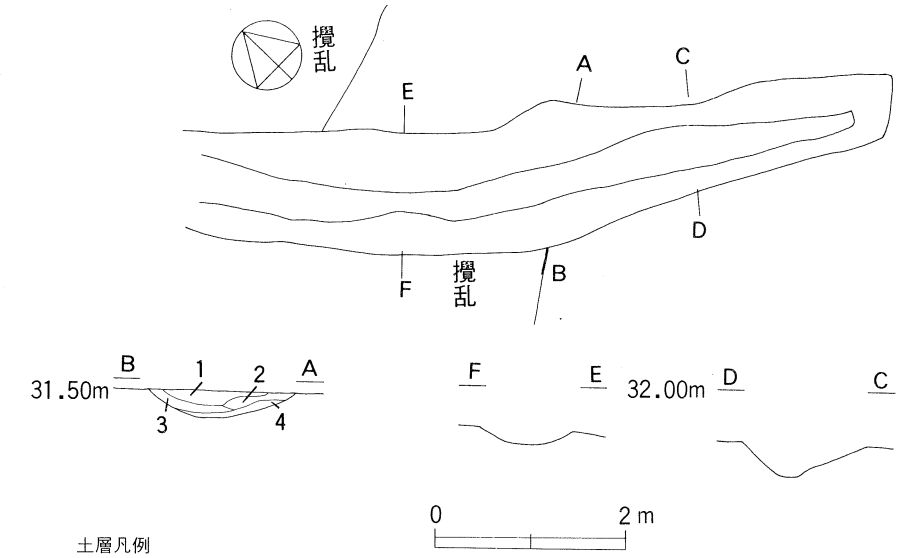
溝としては、調査区の南西部で認められた第１号溝があるのみである。この溝は、中央部から西側の谷に向かって掘り込まれている。確認面での規模は、全長7.40m、幅は東側で0.94m、西側で1.18m、中央部が1.35mであり、深さは0.15m～0.30mを計測する。溝の底面は、丸底で壁は斜めに掘り込まれている。

溝内覆土は、黄褐色土（第１、４層）、暗褐色土（第２層）、黒褐色土（第３層）が堆積しており、堆積状況はほぼレンズ状堆積であり、各上層とも良くしまっている。

出土遺物は、何ら出土しなかった。



第10図　土壙・炉址実測図



土層凡例
1．黄褐色土　捨てロームである
2．暗褐色土　ローム粒子を含む
3．黒褐色土　ローム小ブロック、ローム粒子を含む
4．黄褐色土　ロームブロックを含む

第11図　溝実測図

結　び

当遺跡の調査結果は、今まで述たとおりである。当遺跡は、平遺跡と同一の台地上に所在しており、地名が異なる事から別の遺跡となったが、本来は同一の遺跡であることと判断される。調査した部分は、平遺跡の西側舌状台地上でその先端部であるため、遺跡の中心は調査区南側で台地中央部に所在するものと判断される。

当遺跡からは、3軒の住居址が確認されている。3軒の住居址は、第1、2号住居址が鬼高期で、第3号住居址はこれ以降となろうし、住居址の大きさでは第3号住居址→第1号住居址→第2号住居址の順で大型化しており、カマドも第2号住居址が北カマドである以外西カマドであり、鬼高期の住居址である第1、2号住居址は、貯蔵穴を有しいない。ここに、平遺跡と当遺跡との相異がある。

今回の調査は、風早遺跡の一部を調査したのみであるため、遺跡の全容は不明である。また、平遺跡と当遺跡との関係は、今後の課題といえよう。

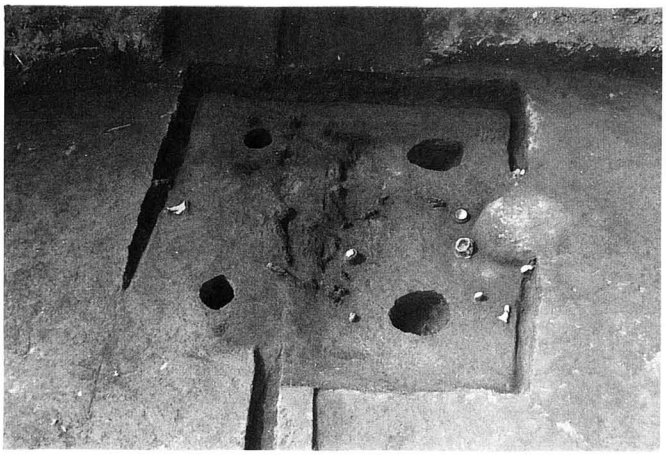
図版１　遺跡全景

遺跡中央部全景

遺跡東側全景

図版２　第１号住居址１

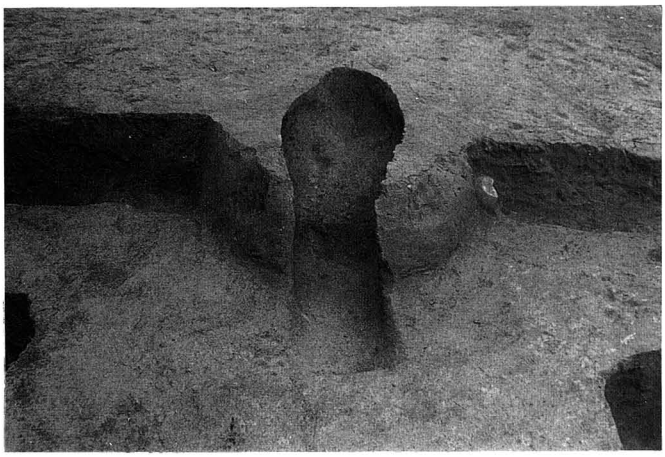
土層



遺構全景及
遺物出土状況

カマド全景及
遺物出土状況

図版３　第１号住居址２

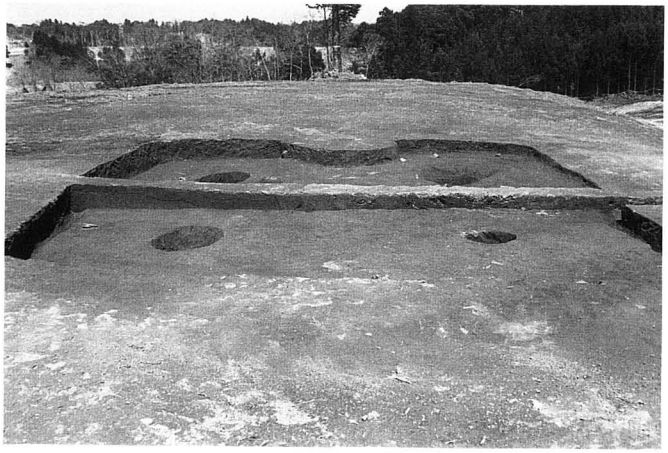


カマド全景（完掘）

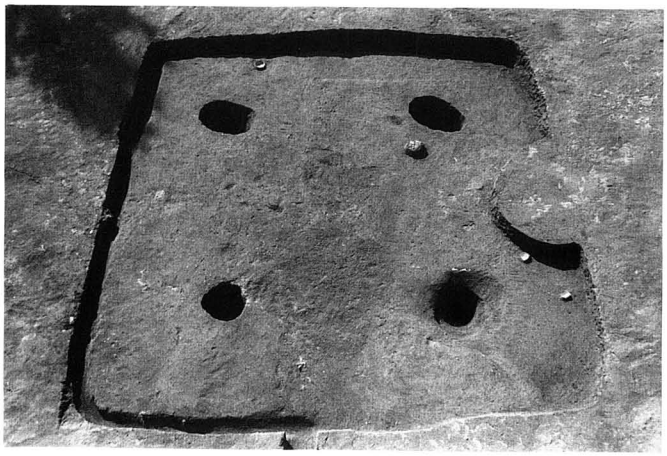
遺物出土状況１

遺物出土状況２

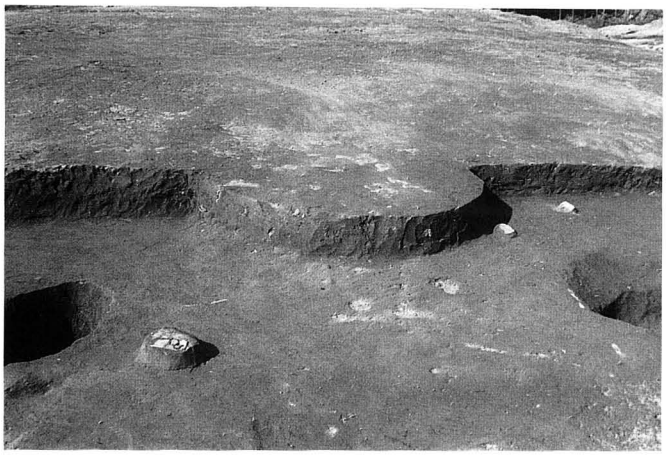
図版４　第２号住居址



土層



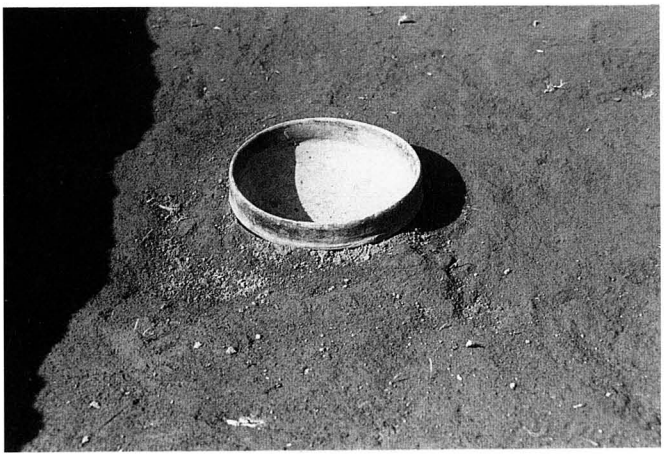
遺構全景及
遺物出土状況



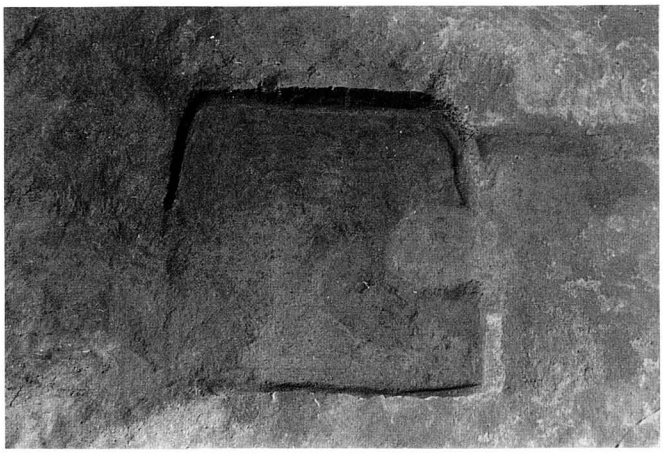
カマド全景及
遺物出土状況

図版５　第２・３号住居址

第２号住居址
カマド全景（完掘）



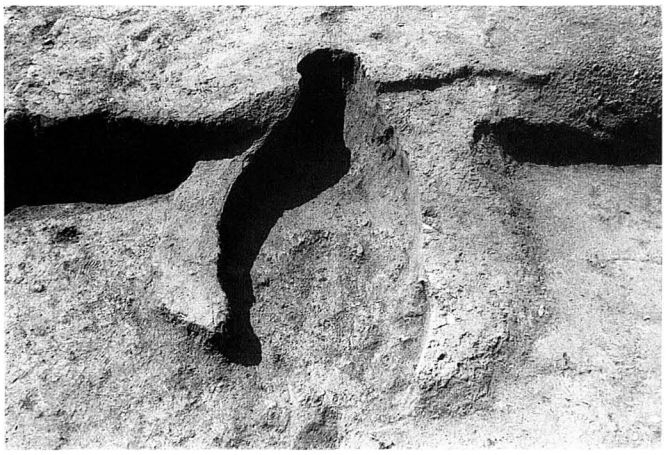
第２号住居址
杯出土状況



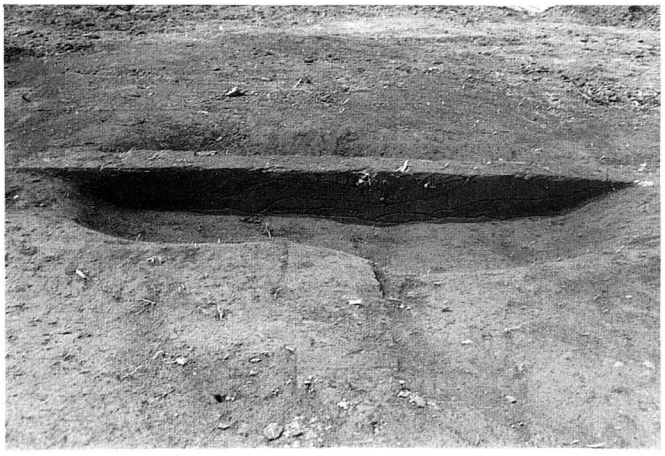
第３号住居址全景

図版６　第３号住居址・第１号土壙

第３号住居址
カマド全景

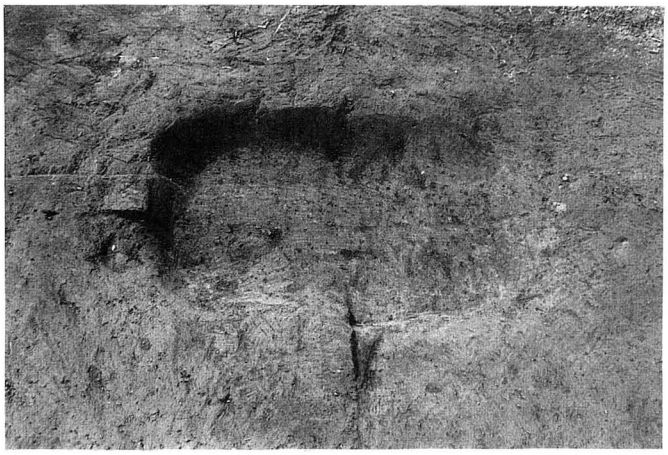


第３号住居址
カマド全景（完掘）

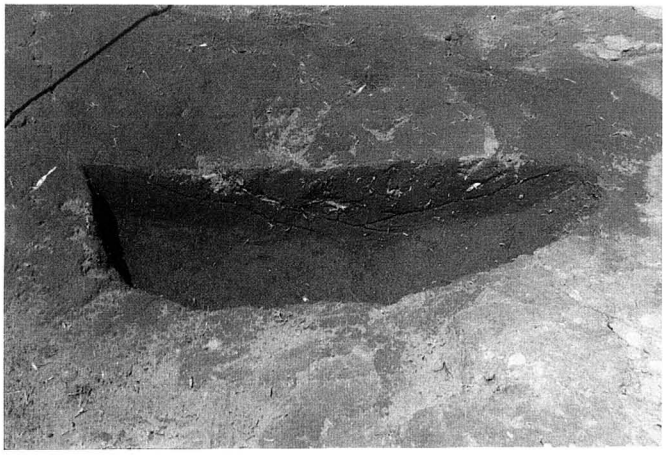


第１号土壙土層

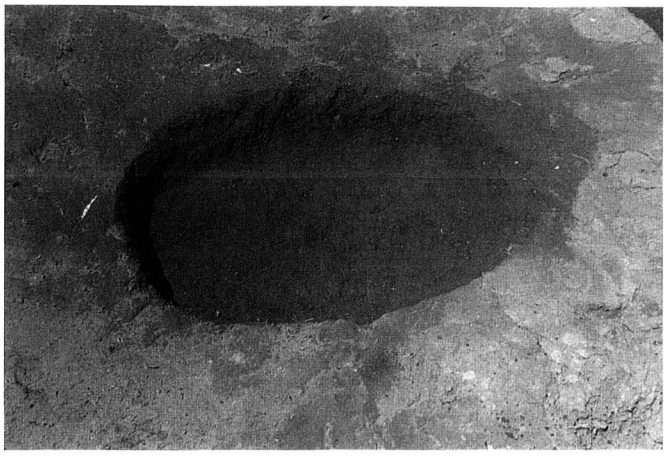
図版７　第１号土壙･炉址



第１号土壙全景



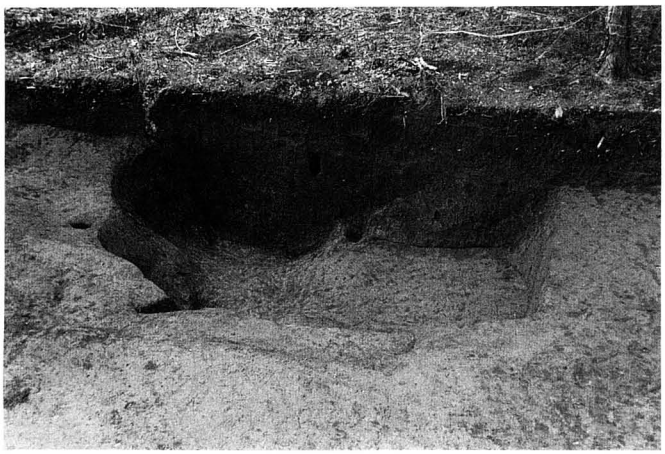
炉址土層



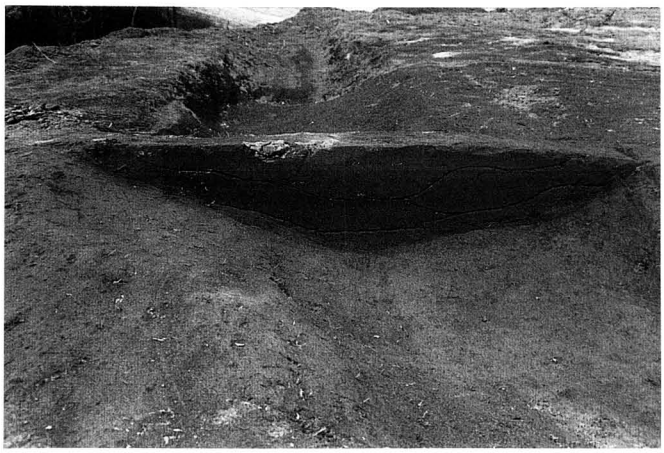
炉址全景

図版８　第２号土壙・第１号溝

第２号土壙土層



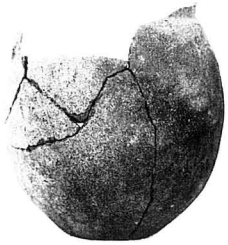
第２号土壙全景



第１号溝土層全景

図版９　住居址出土遺物

第１号住居址



住居址関連遺物

第１号住居址

住居址関連遺物

第２号住居址

住居址関連遺物

茨城県行方郡北浦村

風早遺跡発掘調査報告書

編集発行　山田地区遺跡発掘調査会
北浦村山田2564-10
発 行 日　1990年９月
印　　刷　株式会社 さんゆう社印刷
行方郡玉造町甲2641